

## 広島県三原市立中央図書館蔵『桃売り』絵巻（仮題）

### 解題と翻刻

豊田工業高等専門学校講師 江口啓子  
国立木浦大学校日語日文学科招聘教員 鹿谷祐子  
名古屋大学大学院人文科学研究科附属人類文化遺産  
テクスト学研究センター研究員 末松美咲  
愛知教育大学非常勤講師 服部友香

### 一、はじめに

#### 服部友香

広島県三原市立中央図書館に、題名が失われた御伽草子絵巻二巻が所蔵されている。この絵巻は孤本で、損傷・欠落が多く、冒頭部分や中盤の数段が欠けていることから物語の全容を把握することは難しい。しかし現存部分は、産まれてまもなく両親との離別を余儀なくされた若君が成長後、離散した一族を再会に導いてかつての栄華を取り戻す、という内容で、若君が内裏に仕える実母を探すために桃売りに変装し、自身の境遇と『源氏物語』の巻名を詠み込んだ歌を即興的に披露する、という興味深い趣向を含んでいる。また、この絵巻の画中には詞書と同筆で登場人物の台詞——いわゆる画中文が書き込まれ、各場面の詞書内容を補完するとともに奥行きを与

えている。絵巻における詞書と絵と画中文の関係や、画中文特有の用語・表現などを考える上でも重要な資料といえるのである。

稲賀敬二氏（注一）は、中世の『源氏物語』利用という視点からこの絵巻を紹介し、他の御伽草子との類似点や影響関係にも言及した上で、作者を「源氏物語など古典にもある程度の知識を備えた人物」と想定している。ただし稲賀氏の論は、梗概と本文（詞書・画中文）や絵の一部を紹介するにとどまっている。本稿では、この絵巻の解題と絵巻全体の翻刻を掲出し、その全容を明らかにすることとした。

なお、稲賀氏はこの絵巻を「逸名物語絵巻」と呼称しているが、若君の桃売り姿での即興的な和歌の披露と、それを契機とした母子再会が前半部のひとつの山場をなしていることから、本稿ではこれを仮に『桃売り』絵巻と呼称することとする。

### 二、解題

#### 服部友香

#### ①書誌

まず、『桃売り』絵巻の書誌を以下に示す。

【数量・形態】 紙本着彩、卷子装、上下巻二軸。挿絵全一〇図、上巻六図、下巻三図。残欠本。

【書写年代】 室町期〜近世初期か。

【表紙・見返し】 欠落。

【外題・内題】 上下巻ともに確認できず。

【奥書・印記】 確認できず。

【寸法】

○上巻：紙高、一八糎。全長、六九〇・二糎。第一紙（第一段 詞書）冒頭欠、現存部分四八・六糎、第二紙（第一段 絵）二八・二糎、第三紙（第二段 詞書）五三・五糎、第四紙（第二段 絵）三五・五糎、第五紙（第三段 詞書）二三・六糎、第六紙（第三段 絵）三六・〇糎、第七紙（第四段 詞書）七八・八糎、第八紙（第四段 絵）二三・一糎、第九紙（第五段 詞書）八〇・五糎、第一〇紙（第五段 詞書の続き）一七・一糎、第一一紙（第五段 絵）二六・一糎、第一二紙（第六段 詞書）八〇・三糎、第一三紙（第六段 詞書の続き）五二・八糎、第一四紙（第六段 絵）三六・八糎、第一五紙（第七段 詞書）六九・三糎。

○下巻：紙高、一七・五糎。全長、二〇九・六糎。第一紙（第八段 絵）前半部欠、現存部分七・五糎。第二紙（第九段 詞書）八三・〇糎、第三紙（第九段 絵）二一・〇糎、第四紙（第一〇段 詞書）七七・一糎、第五紙（第一〇段 絵）後半部欠、現存部分二一・〇糎。

絵巻の箱、軸、表紙、見返しは失われており、現在は貼り合わせられた料紙（楮紙）がただ巻かれているだけの状態である。そして上巻は現存七段のうち、第一段の詞書の冒頭部と第七段の絵以降の部分を欠く。下巻は全三段で、冒頭に大きめの欠脱が存在するようである。本稿で第八段とした下巻冒頭段の詞書は全て失われており、絵についても童ひとり、その台詞である画詞「とく御いり候へ。まいりて見まいらせ候はんずるよ。」および、話者不明の画詞の一部「べきか」が残るのみである。次に第九段を見ると、上巻最後の第七段からかなり大きく物語が進展している。第七段は、実母が養母からの手紙を受け取り、母を探している桃売り（若君）が自分の子であることを知ったところで終わっている。しかし第九段では若君が実母のみならず実姉とも再会し、どんな願いも叶えてくれる不思議な袋までも手に入れている。このような第七段と第九段との内容的な懸隔にくわえて、下巻が上巻の半分以下の分量であることを考慮に入れば、下巻冒頭には二段以上の散逸部分が存在しており、そこで母・姉との再会や袋の来歴について詳しく語られていた可能性も否定できない。なお下巻では、一家の再会と大団円を描く第一〇段（下巻第三段）の絵の後半部以降も欠落しており、女房たちに囲繞された実母の姿と、彼女たちが教奇な運命について語らう画詞の一部のみが残存している。

紙背を見ると、上巻第五紙と第六紙の紙継部分に「六」、下巻第四紙と第五紙の紙継部分に「四」と漢数字が記されている。これは現存部分の、当該の紙継部分までの紙数に一致する。この絵巻では基本的に詞書と絵が別々の紙に記されており、前述したように第八段の詞書は完全に失われていることから、少なくとも下巻の紙背の数字については成立時に記されたものとは考えにくい。伝来の過程で軸や表紙、冒頭部などが失われ、現在のかたちに近い状態となったのち、剥落した料紙を修復する際に記されたのではないか。

## ②本文の特徴と成立・享受圏

さて、上巻、下巻の巻頭部分には料紙の損傷に由来する本文（詞書・画中詞）の欠脱が数箇所見られるが、そのままでは意味の通らない箇所や脱字・衍字、レイアウトの乱れも認められる。このことは『桃売り』絵巻がオリジナルではなく転写本であることを示している。そしてレイアウトの乱れの中でも興味深いのは、第一段の画中詞である。これは夫が他の女性に心を移したことを契機として、近江の家を出奔し、都で若君の乳母となった女性（養母）のもとに、夫が訪ねてきて復縁を願う場面であり、画中詞一・三・五・七が養母の台詞、二・四・六が夫の台詞となっている。しかしこのうち画中詞四、五、六は絵の中に書き込みきれなかったようで、絵の外側に、本文よりやや小さめの字で十行にわたって記されている。

この絵の大きさと画中詞の分量のアンバランスは、本絵巻の親本がより大型の絵巻であったことを示しているよう。作品を一八糎程度の、比較的小ぶりの絵巻に仕立てるにあたって、元々は絵の中に書き込まれていた画中詞をすべて画中の余白に書き入れることができなくなり、このような措置が取られたものと推測される。

また、そのほかに注目したい点として、仮名遣いの規範意識のゆるやかさを挙げることができる。この絵巻には以下のように、成立当時の発音が表記に反映された箇所が少なからず見受けられる。

・こと人にあづけたま／わんの御心ならば、（第一段詞書）

・よき人もたせ給ひて、おれらがやうなるものお何にさせたまわんど。（第一段画中詞）

・「もゝめせ」といわせたまへば、（第六段詞書）

・「何事も／ゆふまゝならば、ちゝのおはします／ところをたしかにするやうあら／せたまへ」（第九段詞書）

その多くは、一・三番目の例において傍線で示したようなハ行転呼の反映だが、二番目の例のように、格助詞の「を」を「お」と表記した箇所が詞書三例、画中詞三例の計六例存在している。また四番目の例では「いふ」が「ゆふ」となっている。このような表記の存在から、『桃売り』絵巻の書写者にとって仮名遣いの表記規範が強

い拘束力を持っていなかったことが浮かび上がる。このことは、作品の享受圏を反映しているのではないか。

この絵巻は京に住まう貴族の一家の離散と再会を展開の軸として置いているが、作中では一家に仕える使用人階層の人々の活躍が目立つ。そして、その中で最も重要な役割を果たしているのが若君の乳母（養母）である。彼女は近江において夫とともに若君を大切に養育し、寺院で教育を受けさせ、実の両親との再会を希求する若君に力を貸す。その結果、第一〇段詞書では若君が袋の力で建てた屋敷を管理し、「みくらまち、をさめどの」なども「我がまゝ」にする身の上となるのである。ここから浮かび上がるのは、養母の若君に向けた愛情が最終的に報われ、幸福をつかむという構造であり、物語に養母（あるいは養父母）の出世譚としての側面を認めることができる。

しかもこの養母は貴族的な教養が豊かな人物として描かれており、第二段では実母の和歌に即興的に唱和し、第五段でも桃売りに化けた若君に和歌を詠みかけてその詠歌能力を試している。若君の、『源氏物語』の巻名を詠み込んだ即興歌を披露して我が身の境遇を訴えるという機知と教養は、この養母によってもたらされたことが仄めかされているのである。こうした養母像は、貴族や武士などの屋敷に伺候する階層の人々の理想を反映したもので、これらの階層の人々こそが『桃売り』絵巻の主要な享受者層であった可能性が高い

のではないか。そのため仮名遣いについての規範意識もさほど強くなく、前述のような当時の発音を反映した表記が多分に行われたと推測される。

### ③ 絵

絵は職業絵師の手になるとは考えにくい、稚拙だがしみじみとした味わいのあるもので、御伽草子の挿絵の中では日本民藝館蔵の『築島』絵巻や甲本『浦島』絵巻、サントリー美術館本『かるかや』、天理大学附属図書館本『鼠草紙』絵巻などと共通するところがある。矢島新氏（注二）いうところの「素朴絵」、すなわち「リアリズムのみを目標としないおおらかな具象画」に分類される画風といえよう。矢島氏が「室町時代の絵巻や絵本に見出せる素朴な画風の特徴」として挙げる「自然なプロポーションを外れた人物表現」「背景を描きすぎないこと」「建物などを描く際の、平行線の描けなさ」は、この絵巻の絵にも当てはまるものである。

### ④ 物語内容

さて、現存部分の各段の梗概を示せば以下のようなになる。

#### ○ 上巻

・ 第一段：（冒頭部欠）乳母としての勤め先を探していた二十  
一、二歳の女性（以下、養母）が、ある邸で産まれたばか

りの若君の世話をする事となる。そこに近江から、別れた彼女の夫（以下、養父）がやってきて復縁を求める。養母は養父の心変わりにより、実の娘を人に与えて出奔、上京してきたのだった。

・第二段：話し合いの結果、養母は貧窮していた若君の実の父母から若君を預かり、養父とともに近江に戻る事となる。実の父母は涙ながらに若君と別れる。

・第三段：養父母の間には実子が産まれるが、そちらには乳母をつけ、若君の養育には養母自身が携わって実子以上に大切に育てた。

・第四段：養父母たちは、七歳になった若君を寺院に入れ、学問をさせることにした。これを機会に養父母たちは居を都にうつしたが、その途上で若君の実家を訪ねてみると実両親は行方知れずとなっていた。若君は山で学問を修め、才覚をあらわした。養父母は若君を可愛がるあまり、月に三度は里帰りをさせていた。そして十三歳のとき養父が筑紫に下向すると、以降はずっと養母のもとに身を置かせることとした。そのようなある日、若君は自身の扱いに疑問を抱き、養母を問い質して出生の秘密を聞き出した。

・第五段：若君は実の両親の消息をたずね、実母とおぼしき人物が女房として宮仕えをしていることを知ると、古い草子

の登場人物のように変装して実母を探そうと考えた。養母の助言により、桃売りの女商人に変装し、桃王という名の童を連れて内裏に向かった。

・第六段：若君は実母らしき女性の局を聞くと、西の対の前で彼女が召し使っている便女を相手に『源氏物語』の巻名と自身の境遇とを詠み込んだ和歌を即興で披露しながら桃を売る。

・第七段：桃売りの評判と境遇が実母の耳にも入る。乳母は実母に、事情を記した手紙を書き送る。（以下欠）

#### ○下巻

・第八段：内容不明

・第九段：母、姉と再会した若君は、自在に願いを叶える袋の力で父の所在を知ると手紙を送る。父と兄は手紙を読み、大いに喜んだ。

・第一〇段：若君は乳母夫婦の助けを得て土地を手に入れると、袋の力で御所を建てた。乳母夫婦はこの御所の側に住居を移し、御所には若君の一家が暮らすこととなった。散り散りになっていた一家は無事に再会し、喜びの涙を流した。御所には人々が集まり、馬や車の出入りも激しかったことから、世間ですばらしい評判をとった人と言われるようになった。

稲賀氏は、この物語に御伽草子『猿源氏草紙』や『花世の姫』との関係を想定している。すなわち、若君の桃売り姿での即興的な詠歌に『猿源氏草紙』に出て来る鬮売の男が、古歌や故事の知識を巧みに使って恋を成就する構想など」との関わりを考え、自在に願いを叶える袋により大団円が招来されるという結末の着想源として、山姥からもらった小袋が財宝衣裳を生み出す『花世の姫』を挙げるのである（注三）。

このうち『花世の姫』についての指摘は首肯すべきものである。ただし若君が女装の桃売りに身をやつし、桃一つにつき即興の和歌を一首詠んで生き別れの母に対する思いを表現する、という趣向は、『猿源氏草紙』からはやや距離がある。むしろこの趣向は、第五段で内裏に仕える母を探すと決めた若君が、内裏に潜入する方法を求めて参照した「ふるきさうし」の内容を反映したものと考えられる。

大うちへはさうなくいかでま／いりよらんと、夜るひるあんど  
た／まひて、ふるきさうしなどあめて／見たまふに、まことや  
いづみしきぶ／のすて給ひしこは、おとなしくな／りて、おや  
ともしらでこひじに／まよひ、かんじうりになりて、つい／に  
あひけるとかや。又おとわか／ぎみといふちごも、大りじやう  
／らふにまよひて、もゝをうりた／まふ。さるたぐいあまたあ

りければ、／さやうの事をして、もしたづ／ねもあふやとおぼ  
しくて、  
（第五段詞書）

ここでは若君が、和泉式部の子が母とも知らず彼女に恋をしてしまい、柑子売りとなつて逢瀬を持った話や、内裏の上臈女房に懸想したおとわかぎみという児こが桃を売った話に着想を得、変装による内裏潜入を思い立ったとされている。

このうち前者の「さうし」は、御伽草子『和泉式部』の内容と共通する。『和泉式部』では、赤子のときに和泉式部に捨てられた比叡山の僧・道命が内裏の法華八講の講師をつとめた際、実母と知らずに和泉式部に懸想してしまう。彼は柑子売りに変装して内裏に行き、和泉式部への恋情を詠み込んだ数え歌を「とや。ひとりまるねの、くさまくら、たもとしぼらぬあかつきもなし 二とや、ふたへびやうぶの、うちにねて、こひしき人をいつか見るべき…」と詠みながら下女相手に柑子を売る（注四）。そして事情を問われると、古歌の一部を引いて恋の苦しさを表現するのだった。このような即興での詠作能力と古歌の知識が功を奏し、道命は和泉式部と結ばれることとなるのである。『桃売り』絵巻には和泉式部の子の名が記されていないため、若君が見た「さうし」を現存する『和泉式部』のテキストとそのものと断定することはできないが、このような内容の和泉式部母子相姦譚が参照されていることは確かであろう。

いっぽう後者の典拠は不明だが、第六段の画中詞で若君から桃を買おうとする内裏の便女が「むかしのちこのやうに、『一つとよ、二つとよ』とよませたまへ」と言って即興で和歌を詠ませようとしていることが、内容を推測する上での手掛かりとなる。児とは寺院で僧の傍近くに伺候した元服前の少年である。『桃売り』絵巻では、和泉式部の子は「おとなしく」なつてから実母とは知らずに和泉式部に懸想したとあり、「むかしのちこ」という表現はそぐわない。『和泉式部』でも道命は、和泉式部に懸想した段階で既出家得度を遂げている。よつてこれは、児であるおとわかぎみの物語をふまえた発言と見ることができのではないか。すなわち、おとわかぎみもまた、桃売りに身をやつして内裏に行った際、道命同様に恋の苦しさを題材とした数え歌を詠んでおり、『桃売り』絵巻の便女は若君の桃売り姿におとわかぎみを重ねて、桃を売る際の数え歌を詠むよう求めているのではないか。

そして『桃売り』絵巻は和泉式部の母子相姦譚やおとわかぎみの物語を下敷きにしながらも、そこから恋の要素を排除し、純粹に母子の再会を導くものとして、果物売りへの変装と即興的な詠歌を位置付けたものと考えられる。若君の詠歌は『和泉式部』の道命が詠んだ数え歌のように果物の個数をあらわす数字が詠み込まれているわけではないが、数え歌としての性格を備えていることも注意される。若君が各歌に詠み込んだ『源氏物語』の巻名や、それを連想さ

せる語句を順に掲げると「きりつば」「はゞきゞ」「わかむらさき」「もみぢば（紅葉賀）」「はなのえ（花宴）」「あふひ」「さかき」「花ちるさと」「すま」「あかし」「身をつくし」である。稻賀氏がすでに指摘するように、ここで若君は『源氏物語』の巻名、あるいはそれを想起させる語を、中世の『源氏物語』注釈書で「並びの巻」として扱われている巻名を除いて冒頭から順に詠み込んでいる（注五）。この時代の『源氏物語』をめぐる知の世界をふまえた、より高度な数え歌として、若君の詠歌を位置付けることができるのではないか。

『和泉式部』や『桃売り』絵巻における数え歌は、詠み手が身分に不似合いな教養を有していることを聴衆に提示し、彼らが行商人に身をやつした貴種であることを仄めかす。それが『和泉式部』では恋の成就に繋がり、『桃売り』絵巻では母子の再会を導く、ということになる。果物売りではないが、商人に身をやつした人物の口上に含まれた和歌的な教養が恋の成就や家族の名誉の回復・再会を導く例は『文正草子』や大英博物館本『役行者』にも見え、この時代の物語に用いられたパターンの一つであることが窺われる。これに対して、稻賀氏が『桃売り』絵巻との関係を指摘する『猿源氏草紙』は、身分を偽って遊女と逢瀬を持った鬮売りの猿源氏が、寝言として口走ってしまった鬮売りの口上に和歌的な意味付けを行うことで正体の露見を防ぐ、という内容であり、むしろ先述したようなパターンの変奏、パロディと見てよいだろう（注六）。『桃売り』絵

巻の当該場面も『猿源氏草紙』もひとつの文学史的な流れの中に位置付けられることは確かだが、二作品の間には距離があり、『桃売り』絵巻と直接的な影響関係にあるのは第五段において若君が参照した「さうし」の、和泉式部やおとわかぎみの物語だと考えられるのである。

なお、『桃売り』絵巻の若君は桃売りに変装した際には童形であったが、おとわかぎみも元服を遂げていない「児」の身で桃売りに身をやつして内裏に潜入している点、注意を要する。おとわかぎみの物語は、『桃売り』絵巻にきわめて大きな影響を与えている可能性がある（注七）。

注一：稲賀敬二「逸名物語絵巻と『源氏物語』——三原市立図書館蔵の未紹介資料」、『土車』六二、一九九二年四月↓稲賀敬二コレクション第三巻『源氏物語』とその享受資料』笠間書院、二〇〇七年）および「逸脱と異端のはざま・源氏物語と「中世」——逸名物語絵巻の紹介を兼ねて——」、『中世文学』三七、一九九二年六月↓『源氏物語注釈史と享受史の世界』新典社、二〇〇二年）

注二：矢島新『日本の素朴絵』（ヒエ・ブックス、二〇一一年）

注三：稲賀敬二「逸脱と異端のはざま・源氏物語と「中世」——逸名物語絵巻の紹介を兼ねて——」、『中世文学』三七、一九九二年六月↓『源氏物語注釈史と享受史の世界』新典社、二〇〇二年）

注四：『和泉式部』の引用は、横山重・松本隆信編『室町時代物語大成』第二（角川書店、一九七四年）所収の吉田小五郎氏蔵丹緑本によった。

注五：注三前掲書は、若君が「空蟬」「夕顔」「未摘花」を詠み込んだ歌を披露

していない理由について「これらが並の巻とされていることを勘案して、意識的に取上げなかったものと見られる」と指摘する。

注六：安達敬子『猿源氏草紙』攷——古典引用の方法をめぐる——（『国語国文』六三・一一、一九九四年一月）は、『物くさ太郎』『小男の草子』『浄瑠璃物語』において男たちの和歌の才が貴種性の証しとして付与されているのに対し、徹頭徹尾貴種とは無縁な猿源氏の場合、歌才は自らの卑賤さを隠蔽するために機能していると述べ、『猿源氏草紙』を「歌徳物、教訓物の戯画であるばかりか、和歌説話や故事本説を取り入れることで自らの文化的権威を保証しようとした多くの室町物語の方法をも相対化するもの」と位置付ける。物売りの口上という視点からも、同様のことが言えるだろう。

注七：『桃売り』絵巻では、若君の桃売りへの変装は「異性装」という性格をも帯びているが、これもおとわかぎみの物語の影響である可能性がある。若君は内裏の局町という女性たちの世界で女房相手に桃を売らねばならず、女の姿のほうが都合がよいと判断された可能性もある。だが、御伽草子『和泉式部』の道命は男性の商人の姿で内裏の局町に入り、下女に柑子を売っている。また中世から近世にかけて成立した職人尽絵には女性商人こそ多いが、果物売りの行商は天秤棒を担いだ男性として描かれる。石原正明『江戸職人歌合』（二八〇八）には西瓜を売る「水菓子売り」が描かれ、また柿売りの行商人は岩佐又兵衛筆『職人尽絵巻』および『狂詠犬百人一首』（十七世紀末）に、瓜売りの行商人は近世初期には構図が確立していた『職人尽絵屏風』に登場するが、それらはすべて男性なのだ。以上のことから女装は、内裏に果



物売りとして入り込むために必要不可欠なものではないと考えられる。むしろ、おとわかぎみの物語に「童形の少年が女性の桃売りに変装して意中の女性に接近する」という趣向が含まれており、『桃売り』絵巻はそれを母子再会へと変換して引き継いだのではないか。黒田日出男「女か稚児か」『増補 姿としぐさの中世史』平凡社、二〇〇二年）が指摘するように、中世の図像資料の中の児は外見上、女性に近似した存在である。そして、おとわかぎみの物語同様に児と高貴な女性の恋を題材とする御伽草子『児今参り』においては、そのような児が女装によって相手に接近し、恋を成就させている。おとわかぎみの物語が児の女性的な容姿や『児今参り』の趣向を意識して、児の変装を異性装として描き、それを『桃売り』絵巻が継承した可能性は否定できない。この問題については拙稿「児をめぐる愛と欲望の世界」(阿部泰郎監修、江口啓子、鹿谷祐子、末松美咲、服部友香『室町時代の女装少年×姫―『ちごいま』絵巻の世界―』笠間書院、近刊)においても取り上げているので、ご参照いただければ幸いである。

### 三、『桃売り』絵巻 翻刻

#### ◆凡例

- ・翻刻は、服部が第一～三段、末松が第四・五段、鹿谷が第六・七段、江口が第八～一〇段を担当し、全員で確認を行った。
- ・各段の翻刻は、詞書、画中詞の順に掲出した。画中詞は原本に附されている番号の順に翻刻し、番号のないものについては推測した番号を（ ）に入れて記した。また画中詞の翻刻の前に、簡潔

な絵の説明を【 】に入れて記した。

・翻刻は底本に忠実を期し、仮名遣い・改行も底本のままとしたが、読解の便宜をはかるべく、以下のような操作を行った。

- 一、私に句読点、濁点を附し、詞書中の会話には「」を施した。また用字は通行の字体に従った。
- 二、詞書中の和歌は基本的に二字下げで記した。ただし、地の文と一体化している和歌については、底本の表記を尊重した。
- 三、底本の破損により判読不能の箇所は■で表し、推測される読みがある場合はその右に（ ）に入れて記した。また教行以上の本文の欠落が見られる場合は、その旨を（ ）に入れて記した。
- 四、脱字、衍字や誤写と考えられる部分については、「ママ」を記した。また本文の乱れが大きく、原型が推測できない場合は、注を附して解説を施した。
- 五、画中詞については、底本の位置や改行箇所を反映せず、番号順に記した。番号がないものの、読む順番を推測することができ、画中詞については、当該画中詞行頭に番号を（ ）に入れて記した。また、それぞれの台詞のあとに、発話者と推測される人物を（ ）に入れて記した。

#### ◆上巻翻刻

##### 第一段

##### 《詞書》

（これ以前の本文は欠）  
のとのぞみある」と申けれ

ば、「はづかしながら、なきけもあらにこそ」とて、よびとりたまへり。廿二三のほどにてよきおんななれば、すへとげがたし

おぼすに、あふみのくによ

(りおと)

こたづねきたりて、「あわん」といへり。とかくいひてかへしけれ

ど、かくれなかりければ、「たちかへり

たまへ。ことのみ心あらじ」と、かごと

をなしてわびたりければ、おんなもよはるころのあるとかや、

「ことおんなにおよびけるをうら

みて、むすめをも人にやりて

いではんべりしかど、かく申け

るをいかゞせん。此君にわかれ

たてまつらん事こそかなしく

はんべれ」となげく。おとのき

こしめして、うへにかたらひたま

ふやう、「わがこにおもひてそだ

てよとて、我がきみともにやり

たまへ。かなし」との給ふは、かみも、さ

もやゆへりてましとおぼす

なり。このよしめのとにかたら

ひたまへば、「こと人にあづけたまわんの御心ならば、まことにおなじくはさもやはんべらん。おとこにたづねはんべりてこそ」とて御まへをたちけるに、うへはむねつぶれて、なげかしくおぼす。

#### 《画中詞》

【絵1——若君の乳母（養母）のもとに別れた夫（養父）が訪れ、復縁を求める。】

一 なにとて御いり候ぞ。わが身ははや、こなたへ御めのとにいてまいらせ候へば、そなたへかへり候事は、なか／＼おもひよらぬことにて候。とく御かへり候へと。〈養母〉

二 はる／＼とたづねのぼり候に、さやうにぶつきりなることなおほせそ。ひらにおぼしめしなをして、御かへり候へ。〈養父〉

三 よき人もたせ給ひて、おれらがやうなるものお何にさせたまわんぞ。うつ／＼なや。〈養母〉

四 それははや、いなせ候。御心やすくおぼしめし候へ。いかやうなるかたき事もしてまいらせ候はん。こののちにさやうのふるまいあるまじく候。〈養父〉

五 こおば人にやりて、とりかへすことはなるまじ。かへりてもつれ／＼ならんおばいかにせん。あづかりまいらせ候わかぎみをつれてゆかんならば、いとまいださんとおほせ事候が、なにと申候はんぞ。それならばかへり候はんぞ。〈養母〉

六 それこそよきことにて候へ。つれまいらせ候てなりとも、御かへり候へ。〈養父〉  
七 そのよしなを、だんごう申候はん。〈養母〉

第二段

《詞書》

さてこのめのと、おとこにかくと  
かたりたまへば、「さもやとおもふなり。  
むすめは人にとらせければ、とり  
かへすべきことならず。又たち  
かへりても、つれづれのなぐさみには  
なにをかせん」といゑりければ、「さ  
もおほさば、ともかくも」といふに、  
うれしくてかくと申せば、さ  
すがにあわれにはなれがたく  
おぼしたり。さりとてをしみとゞ  
むべきにあらねば、いでたつ  
むかひにくるまなどとりよせ  
ければ、「はうへよにあらましかば、  
かゝるうき事はあらじを」とて、  
いだきとり、なみだをながし給ひて、  
すへの世もしらぬ松のみとりごに  
ひきわかれぬるそでのつゆけさ  
とて、御そでをかほにおしあてた

たまふは、めのとなく、<sup>3</sup>「いのち  
あれば又あふみちにかへるなり  
ふたばの松のすへをたのめよ」。  
とのもさすがにあはれとおぼさ  
るれば、御なをしのそでにいだき  
とりたまひて、めのとにたぶとて、  
いわねなる松のみどりごひきわけて  
ちよふるそでのやどにうつせり  
とて、涙をおしのごひたまへり。めの  
とはづかしくもあわれにもおぼへ  
て、物もいわれず。たえかね、きみた  
ち、こもきとてさぶらうおさあ  
いものも、なごりおしみてなくこ  
とかぎりなし。

《画中詞》

【絵2——実の両親・兄弟と若君の別れ】

- (一) かへりたまふは心やすくよき事なり。このこのこと、たのみまいらせ候。さてもあわれなる事かな。〈実父〉  
二 なみだのほかは、ことのはも御いりなく候。〈養母〉  
(三) あなあさまし。いかにせん。〈実母〉  
四 あのちいさきわかぎみにそへば、やりたくもなきものをのう。〈童一〉  
五 いや、やるまひのふ。〈童二〉  
六 あらかなしや。いつもいだきまいらせんとおもひたれば。いづ

くへつれまいらせ候て御いり候ぞのふ。〈童三〉

第三段

《詞書》

かくてくるまにのせたてまつりて  
くだる。ちゝもいとねんごろに  
あつかひたてまつりて、<sup>4</sup>などつけ  
て、<sup>5</sup>やうゆくするほどに、三才に  
なりたまへば、おとゝいできぬ。ちゝよ  
ろこびて、わかぎみはなをこそか  
たじけなけれと、おとゝにはめの  
とをたづねてつけ、わかぎみお  
ばはゝにそだてさせけり。まこと  
に、わがこよりも大事のことに  
ぞもてあつかひける。

《画中詞》

【絵3——乳母一族に養育される若君】

一 ちゝうまふのふ。〈若君〉

(二) あら。いおしや。こゝへ御いり候へ。ちまふまいらせ候はん。  
〈養母〉

三 ちゝ御まいり候て、御あそび候へ。〈養父〉

四 おう。〈若君〉

五 おとゝがとくあれほどになれかし。〈養母〉

六 たゞいまの事そろよ。〈養父〉

一 この御このあひらしさよ。御あにわかごによくにさせたまいた  
るよ。〈弟の乳母〉

二 ちと、いだきまいらせ候はん。〈童〉

三 まづ御まち候へ。ちまふまいらせ候て。〈弟の乳母〉

四 おれがいだきまいらせ候はん。おう。あこはのちにいだきまい  
らせさせたまへ。〈男〉

五 ありがたいや。こはきぞ。のちにいだきまいらせたまへ。〈童〉

第四段

《詞書》

このわかぎみ<sup>六七</sup>七才になりたま  
へば、てらへのぼせたてまつりて、  
がくもんをもさせたてまつり  
まほしきを、こゝにてはほどゝお  
し、みやこへのぼりてこそあらめ  
とて、しる人のかたへ富をもとめ  
などしてのぼりぬ。あるじわか  
ぎみの御ふる里をたづぬるに、い  
にしへすみたまひしところは  
こと人のすみかとなりて、その  
御ゆくへしれる人なし。いづ  
こをはかたとづねんかたもなけ  
れば、かいなくて、わかぎみを山へ

のぼせたてまつり、ちゑさいかく  
人にすぐれたまへり。ちゑはゝ  
見たてまつり<sup>マ</sup>ことのわびしく、月  
に三どばかりよびくだしたてまつる。  
このちゑつくしへくだる事  
ありて、このわかぎみをひさしく  
里におきたてまつる。そのころ  
十にみつばかりあまりたまひけ<sup>マ</sup>  
ど、こよなくおよすけたまひ  
て、十五、六のほどなり。ある時<sup>7</sup>あ  
めしやかにうちとゞきて、つれ  
づなるおりふし、「いかにや、はゝご  
ぜん、あまたあるこのなかに、我を  
とりわきわかぎみとなづけて  
あがめたまふは、なにのゆへぞや」と  
のたまへば、おとなびたまふにそ  
へて、かゝる御心のつきて、御ふしん  
にてあわれにおぼへたてまつ  
れ。たづねたまわずは、しらずか  
ほにてもありぬべけれど、かくの  
たまふに、いかでかかくしたてまつ  
るべきとて、こしかたよりの事

をかたり申給ひければ、わか  
ぎみ涙をながして、「さてはまこ  
どのおやはうらめしく、ちゑはゝ  
よりほかにはおもふまじかりけれ  
ど、しらすつるもつみふかし。  
たづねたてまつらばや」とのた  
まへば、「いにしへは五でうあたり  
すみたまふ。その御あとをたづ  
ぬれど、こと人のすみかにて、そ  
の御ゆくへしる人なし」と申け  
れば、「かいなくこそ」と申けるに、  
いかにせんとぞなげきたまふ。

【絵四——若君、出生の秘密を聞く】

《画中詞》

- 一 たづねまいらせ候たき事の候が、はづかしく候。〈若君〉
- 二 なに事にて御いり候ぞ。おほせ候へ。〈養母〉
- 三 あまたのこどものなかに、なにとてわれはわかぎみとなづけて  
御あがめ候ぞ。〈若君〉
- 四 おとなびさせたま<sup>マ</sup>まひ候て、さやうの御ふしんこそあわれにお  
もひ候へ。くわしくかたりてきかせまいらせ候はん。〈養母〉
- 五 御物がたりきゝまいらせ候へば、まことにふしぎにあはれにて  
候。かやうにする人はあるまじく候。御ふたりながら、よくに

あひまいらせ候たる御心やのふ。〈女房〉

第五段

そのうちよりは、たゞこの事のみ御心にかゝりて、つねにぶつしんゑもいのり、「さるべき人や。しける」と人にたづねなどしたまふほどに、ある人の申けるは、「いづれの御かたとはしらねども、五でうあたりにすみたまひし人の、世にすみわび給ひて、御子たちをばこゝかしこにおとしをきて、大うちへまいりたまひて、御みやづかひのよしをぞきゝたてまつる」と申ければ、いかにしてかはたしかにしらんなげかしくて、神ほとけまことしらせたまへといのり給ふ。おもひねの夢にも、「うちにさぶらひたまふ」と人の申と御らんじければ、大うちへはさうなくいかでまいるいよらんと、夜るひるあんどじたまひて、ふるきさうしなどあめて見たまふに、まことやいづみしきぶのすて給ひしこは、おとなしくな

りて、おやともしらでこひじにまよひ、かんじうりになりて、ついにあひけるとかや。又おとわかぎみといふちごも、大りじやうらふにまよひて、もゝをうりたまふ。さるたぐいあまたありければ、さやうの事をして、もしたづねもあふやとおぼしくて、はゝのそばへたちより、「わが申さん事をきかせたまわんや」とのたまへば、「何事にてもいつか御心にそむく事のはんべる。あるまじき事なれども、のたまはせんまゝにこそは」とうちわらひたまへば、「かくこそおもふか」と心うつくしうかたらひたまへば、身にしみていとをしくおぼへて、「なにかよからん」といふところに、「もゝめせ」とて、もてきたれるこそ、おりにさひわいと申事なれ。「かならず御心のまゝなるべし」といひて、とりよせてはこのふたにつませて、もゝわうといふわらにはもたせて、おんなのすがたにいでたちたまへば、めのとうち見て、「うつくしの御すがた

ママ  
たや、たゞおんなのやうにこそおは

しけれ。かまひて御うたよくあ

そばせ」といふ。「うたのやうこそ

くるしけれ」とのたまへば、めのと

心みんとやおもひけん、

もゝわうにもゝをもたするおとめは

いくよろづよのよわひをかへん

といひかくれば、ちごとりあへず

もゝわうがつみかさねたるもゝなれば

かぎりしられぬきみがゆくすへ

とのたまへば、「おそろしの御うち

とさや」とうちへみて、「御うたも

心やすくこそ」とほめたてま

つれば、はづかしげにていで

させたまふ。

【絵五——若君、女装し桃売りに変装する】

《画中詞》

一 おそろしの。御うちとかや。うたもはや心やすきよ。とく御かへ

りあれよと。《養母》

二 おう、やがてかへりまいらせ候。《若君》

三 このもゝをうちこぼしてはいかゞせん。《桃王》

四 よくもちてまいれよ。《若君》

五 がいぶんよくもちまいらせ候べく候。《桃王》

第六段

《詞書》

さて、その御かたの御つぼねをたづ

ねきゝ給ひて、にしのたいのまへ

にて「もゝめせ」といわせたまへば、よ

しあるびでういでゝ、「いかほどに

てはんべるぞ。むかしの人のやう

に歌をそへたまへや。さらはずはとら

じ」といひければ、「さらば、そへて

まいらせん」とのたまふ。うちゑみて、

『ひとつとよ、二つとよ』とよませ

たまへば」といへる。ちご、うちわら

ひて、「二つ二つのいわれもわきま

へはんべらねど、。我が身のうたを

つらねはんべらん。あわれともきゝ

たまへや」とて、一ついれて、

きりつぼといふよりおやにわかれつゝ

もゝの日かずもそはぬ身ぞうき

はゝきゝのふせやもしらずちゝもなし

ありと見えねばあふよしもなし

すり衣わかむらさきのあらねども

おやをしのぶのみだれごゝろよ

くれなひのちしおにそむるゝもみぢばの

こがるゝ色のふかきとをしれ

1<sub>2</sub>はなのえうすきちぎりよおやとこの  
このよひとつをそはですつれば  
わがおやにたづねあふひのありといはゞ  
いのちにかへてまたましものを  
さかきばのかはらぬ色もある物を  
我がふる里はいづくなるらん  
おひいでしくちきの本をたづぬれば  
花ちるさともなるぞわびしき  
すまのうらの月をともとやながめまし  
おやのふるすもしらぬとりの子  
あかしかねゆめにもあふと見ぬおやを  
しのぶこの身ぞあわれなりける  
とて、いれたりければ、このびでう、「歌の  
いわれはしらねども、これはおやをた  
づねたまふ人か、いたわしや。ききごと  
にておもしろや。さりながら、何にも  
いわれといふ事のあるぞとよ。いま  
ひとつ」と申ければ、いるゝとて、  
身をつくしおやとこふれどあはれとも  
いふ人なしにかへりもやせん  
とのたまふ。このびでよ心かしこき  
ものにて、十一まではかねてもよみ  
給ふべし。又は人にもあつらへたまふ  
らん。このちのかくごはあらし。心みん、

とおもひて、「二つのいれはつねの事也。  
いま一つも二つもいれさせたまへ。1<sub>3</sub>みめに  
て心のやしきよ。まよひたるぞや」と  
いへば、  
うらめしやたづぬるおやにゑあはぬは  
心の心をたのみつるかな  
といふ。「よくぶかげなれど、いま一つ  
こそ」と申しければ、  
はるかぜもふきつたへよやみどりこの  
おひいでしねをたづねけりとは  
とのたまへば、「あらく、おもしろのこと  
のはや。あまりにうたのおもしろ  
きこそ、よくぼり申たれ。ふ  
たうじんとおぼしめすべからず」  
と申せば、「まことにやさしき人の  
心ばへなり。『もし、この御つぼねま  
ちにこを人にやりたまふやある』と  
たづね申てきかせたまへ」とのた  
まへば、「さやうの御かたはあまたお  
わしける。わが御しうも、ひめぎみ  
わかぎみ二人おはしまし候を、人  
にやりたまひて、御みやづかひなり。又、  
うみおとしたまいて、もゝかもすぎ  
ざるに、御めのとにつけてあふみ  
のくにへくだし給ひし。そのおり



ふしのあわれなりし御事ども、  
いつも御物がたりあり。さきにさ  
やうの御ことばのきこへしかど、それ  
はわかにてぞをはせし」などいふ  
に、さなりけりとうれしき、くわし  
くたづねまほしけれど、すがた  
にはじて、「さらば、又こそまいらめ」  
とて、のこりたるもゝみなおし  
やりてかへりたまへば、ふしぎ  
にぞおもひける。

【繪六——内裏で桃を売る若君】

《画中詞》

- 一 <sup>14</sup>見かとなるもゝといゝ、みめのよきかほと<sup>15</sup>ひゝ、かたくま  
よひたるぞ。むかしのちこのやうに、「一つとよ、二つとよ」と  
よませたまへ。〈便女〉
- 二 むかしの人のやうにおかしきふしはあるまじく候へども、わが  
身のうさをつゞけまいらせ候はんと。〈若君〉
- 三 おう、なにとなりともよませ給へ。きゝしり候はず候とも、う  
けまいらせ候はん。〈便女〉
- 一 あら、ふしぎや。いづれにたゞ物にてはあらじ。身のうへにお  
もひくらべられて、あわれにかなしや。〈女房一〉
- 二 まことにふしぎなる御歌よみにて候。いかゞ。〈女房二〉

第七段

《詞書》

この御しうときこへし人は、あはれ  
なる事をきくに、いとよくにたる  
ことなれども、おんなゝればわがこ  
にはあらじ。いかゞなりぬらんと、いま  
さらのやうにおぼしいでゝ、ふしし  
づみたまへり。わかぎみ、かへりたま  
へりしかば、くわしくかたりたま  
て、「たゞそなりけり、とおもひしか  
ど、御かほもおぼへねば、見てもそ  
かいなし。まづかへりてこそとお  
ぼえて、いそぎかへりしなり。この  
たびはいかゞせん」とかたらひたまへば、  
「それとだにしりぬれば、やす  
きほどの御事なり。御心やすく  
おぼしめせ」と申ければ、うれし  
くおぼすなかに、「ちゝぎみはよ  
におはしまさぬにやと、これのみ  
心にかゝりてむねふたがりぬる  
なり」とのたまへば、まことに、たづねき  
きてもその御ゆくへのいかならん。  
わかぎみのなきたまはん事いか  
にせん、とおもひわたるに、二三日も  
すぎぬ。我が君のいかにまちおは

すらんとおもひて、御ふみかき、  
このもゝわうにもたせて、「あり  
しびでうをたづねてまいらせ  
給へ」とてやりたまふ。もゝわう、か  
ねてたづねしりしかば、御つぼね  
のまへにわたりて、「あづまこそに  
物申さん」といへば、やがていでゝ、「たそ  
ととう。「御しうさまへそのふみま  
いらせたまへ」といへば、「いづくよりと  
か申さん。ひといいのもゝうりより  
まいりぬるか」ととへば、「そのはゝ  
うへよりまいる。ことはりはなかに  
こそあるらん。たゞまいらせたま  
へ」といへば、ござかしきわらはかなと  
て、とりてうちへまいる。此よし申  
せば、人たがへなるべし、されどみん  
とて、とりて御らんずれば、うわ  
づゝみに、「あふみのくにゝありし物、  
のぼりたてまつる」とあり。なにと  
やらん、このほどおもひあわする  
(後欠)

◆下巻翻刻  
第八段  
《詞書》

全欠

《画中詞》

【絵8―屋敷の中で童を含む数人が話し合っているか】  
三　とく御いり候へ。まいりて見まいらせ候はんずるよ。〈童〉  
(欠)ベきか。〈絵の欠脱により話者不明〉  
【残りの部分は欠】

第九段

《詞書》

人々をよびてもてなし、さかもり  
してなぐさみたまふところに、  
ちゝかへりたまいて、やがてこのざ  
しきにてこのよしをかたり  
たまへば、ふしぎなる(破損により数文字欠)  
さけのみたまふ。「はゝうへの御かた  
へまいらせたき物あり」とのたまへば、  
もたせてまひらせんと、「なにゝても」  
といへり。大へいなどさまくのさか  
なをこしらへていだしたまへり。  
ふしぎなる事かなとおもひ、や  
がてもたせてたてま(破損により数文字欠)うへ  
よろこびさかへたまいて、御つぼね  
の人々をみなよびもてなした  
まへば、「かゝらんこともがな」とうら

やまぬ人なし。はうへも、めのとの心ばへなるらんと、ありがたくぞおぼしける。わかぎみ心のまにうれしくおぼせども、ちぎみの御ゆくゑをしらぬかなしさよと、おぼしめしめぐらすほどに、このふくろにむかひて、「何事もゆふまゝならば、ちのおはしますところをたしかにするやうあらせたまへ」とのたまわすれば、まき物一ついでたり。とりあげ、ひらき見たまへば、みのくににおはしますところのなまでたしかにかゝれたり。うれしくて、はにかたらひ給へば、「ち々に申て、人くだしたてまつらん」といへば、文かきたまふ。「この御返事により、御むかひくだしたてまつらん」とのたまへば、「はうへの御かたへもとの御かたへも人くだし候はんづる。御文を」とのたまへば、よろこびたまいてまいらせらる。あねぎみにもあひたてまつる。ちぎみ、あにぎみばかりなれば、いとゆかしとおぼしける。御つかひ、いそぎ

くだるほどに、やがてゆきつきて、たづねあひたてまつり、御文をたてまつる。御身をかくして、あさましげなるすまいておはしましけるが、この文を御らんじて、おどろきよろこび給ふ。わかぎみもよそにましましけるを、こなたへよびとりたまいて、「かゝる事のあれば、のぼらんとこそおもへ」との給へば、「さらば御とも申べきなり」とぞのたまひける。

《画中詞》

【絵9—文を手にする実父と兄君】

- 一 きやうより人まいらせ候て、御さうきまいらせ候て、御うれしく候。〈兄君〉
- 二 なふ、このふみ見たまへ。あふみへくだしつる<sup>1</sup>。おさいものが、ふしぎなるしあわせにて、むかひをこせんといふは。〈実父〉
- 三 さればふしぎ<sup>ママ</sup>やなる事にて候。やがて御とも申候べく候。〈兄君〉

第十段

《詞書》

このつかいとのぼるべけれど、「御むかい

たてまつらん」とあれば、まづとゞまりぬ。「おもひがけぬ御おとづれこそ返々もうれしけれ」とおほせければ、かへりのぼりてありのまゝに申。わかぎみよろこびたまふことかぎりなし。めのと、「御やどおぼいづこにとかおぼしめし候ぞ。ひろくばこれへもいれたてまつるべけれど、この<sup>1</sup>しきなれば」と申に、「たゞこのあたりにひろき地だにあらば、いゑづくりせん事はやすし」とのたまふ。ちゝはしりまひて、やがてかいとりて、かくと申せば、そのゆふぐれにそうへしのびておはして、<sup>1</sup>。そでとりいだし、御いゑづくりのやうをたくみたまいてこいたまへば、くうでんらうかくの御しよいできたり。地もおのづからひろくなり、ついぢをつき、もんをたて、さまぐの事あり。人あまたおき給ふべきふだをたてさせ給ふに、みやこのことなれば、時のまに、せんにんばかりあつまり、やがてみのへ御むかへにくだし給ふ。はゝうへ、あねぎみおも、御いとま申、やがてこの御しよへう

つしたてまつり、とのをまちきこえたまふぎしき、めでたし。めのとふたりいたちて、まかなひたてまつる。みくらまち、をさめどのなどいふ事も我がまゝにして物もたらしげなり。このほどのいへはあしかりけるとて、やがてこぼちてこの御しよにひきそへつくりておかせたまふ。さてみのより御のぼりありければ、よろこびたまいて、やがてこのとのへうつしたてまつり給ふ。じゆゑいの秋のもみぢとやらん、ちりくになりたまひしが御しよにかへりあつませたまいて、よろこびの御なみだゆしげなり。むま、くるまなど、ところせきまでいである。かくれなかりければ、よのきこえいみじき人とぞいはれたまひけり。

《画中詞》

【絵10―家族が一堂に会し、再会を喜ぶ】  
一 さてもふしぎなる事や。かやうに一とこころによりあふことはゆ

めにてもなかりしほ、いまだうつゝともわきまへぬ心ちして候。

〈実母〉

二 まことにさやうにおぼしめし候が、<sup>1</sup>御ことはにて候。御若君さまの御くわほうとは申ながら、こかな<sup>マ</sup>御おや<sup>マ</sup>さまのため、めでたき事ぞ。〈女房一〉

【三〇五欠】

六 たゞ御しんありて、わろき事は御いり候はんげに候。〈女房二〉  
【残りの部分は欠】

1…「おとの」は「御殿」、あるいは「大殿」で、若君の実父をさす。第二段詞書でも、若君の実父が「との」と呼称されている。

2…「かみ」は「上」の誤りで、若君の母上（実母）のこと。「ゆへり」は「ゆつり」の誤写で、若君を乳母（養母）に護ることを意味する。

3…地の文と一体化しているが、実母の「すへの世も」歌に養母が唱和した和歌と見てよいだろう。

4…「ななどつけて」の「な」脱か。

5…「やういく（養育）」か。

6…「いとおしや」の「と」脱か。

7…「あめしめやかにうちそそぎて」の誤写か。雨が「うちそそぐ」という表現は『宇治拾遺物語』「九 御室戸僧正の事、一条寺僧正の事」や『桐火桶』、『筑波問答』に見える。

8…「しりける」の「り」脱か。

9…第五段詞書中の養母の台詞「おそろしの御くちとさや」に対応する部分で

あるため、「くちとか」は「くちとさ」の誤写と考えられる。

10…この若君の台詞は第六段の画中詞二に対応した内容であり、本来は画中詞二同様に「わが身のうさ」とあった可能性も考えられる。

11…『源氏物語』の紅葉賀巻を連想させる語として「もみぢば」が用いられていると考えられる。

12…「はなのえ（花の枝）」という語を『源氏物語』の「花宴」という巻名を連想させるものとして用いている可能性も否定できないが、「はなのえ」では第一句が字足らずになってしまつたため、「はなのえん」の「ん」脱と解しておく。「えん」には「縁」が掛けられ、下の「うすきちぎり」へと続いてゆくことで、母子の縁の薄さを嘆く表現となっている。

13…「みめにて心のやしさよ」は「みめよく心のやしさよ」、あるいは「みめにて心のいやしさよ」の誤写と推測される。前者ならば、便女が女装した若君の容貌の美しさと、『源氏物語』の巻名を詠み込んだ即興歌で不遇のわが身を表現する風雅なふるまいを評した発言ということになる。第六段の画中詞一でも便女が若君を「みめのよきかほ」と称賛している点、注意される。

ただ、詞書中ではこの便女は直前に「いま一つも二つもいれさせたまへ」と、桃を渡しながらさらに歌を詠むことを求めているため、後者と取って、「三つ（の桃）」では意地汚い」という意味に解してもよいのではないか。

14…「見ごと」の誤写か。

15…「いゝ」の誤写、あるいは仮名遣いの誤りと考えられる。

16…「おさあいもの（幼い者）」の「あ」脱か。なお「おさい」を「幼い」の意で用いる例が、『お湯殿の上の日記』天正十四年四月十日条や甲子園学院本『児今参り』に見える。単なる脱字ではなく、当時の発音を反映した表記と見るべきかもしれない。

17…「しき」と読んで、「敷（一区画の土地の広さ）」や「式（状況）」のこと

と解しておく。だが、「仕儀しぎ(ありさま)」や「時宜(状況・状態)」である可能性も否定はできない。

18：「そでよりとりいだし」の「より」脱か。袖から願いを叶える袋を取り出したということ。

19：「御ことはり」の「り」脱か。

〔附記〕

本稿は課題設定における先導的人文学・社会科学研究推進事業「絵ものがたりメディア文化遺産の普遍的価値の国際共同研究による探求と発信」(研究代表者：阿部泰郎(名古屋大学人文学研究科教授))の成果です。阿部教授および貴重な資料の調査・翻刻紹介をご許可いただきました三原市立中央図書館の関係者各位に、心より御礼申し上げます。「編集部より」↪名の論文執筆者は名古屋大学文学研究科博士後期課程出身の為、本誌に掲載した。

〔編集部注〕 四名の論文執筆者は、過去に名古屋大学文学研究科博士後期課程に在学していた為、本誌に掲載した。